

いつのまにか、 スポーツジャーナリスト

折山淑美 (高23回)

始まりは新宿ゴールデン街から

64歳になった今、スポーツライター、あるいはスポーツジャーナリストと名乗っている。それは自分が一番不思議に思っていることかもしれない。しかし、いつの間にかこうなっていたというのが正直なところだ。

キッカケは新宿ゴールデン街だった。大学卒業後は、今でいうフリーター生活が続いていたが、2年間通った映画講座の講師だった映画評論家の松田政男さんや映画作家の金井勝さんに連れられていったのがゴールデン街の銀河系という店。そこに入り浸るようになっていくうちに、新日鉄釜石の8連覇に感動した作家の森詠さんたちがラグビーチームを作ろうと言いだしたのだ。

当時の自分は30歳過ぎて、最年少。体力にも自信があった。素人が集まって練習や試合後に酒を飲むのを楽しみ

興味の赴くままに取材をしたが、元々スポーツ観戦が好きで、会議で出すテーマもスポーツ物が多かった。最初はデータを渡してアンカーマンに文章をまとめてもらっていたが、そのうち自分でも書くようになった。長いインタビューをしても600字程度にまとめる訓練が自然にできたことが、のちのちになってもすごく役立ったと思う。

そんな中で、1987年世界選手権競歩代表の園原健弘(高33回)が飯田高校の後輩だと知り、陸上大会の取材にも頻繁に行くようになった。

当時、一般週刊誌で扱うスポーツは野球くらいで、今とは状況も違った。だが91年に東京で世界陸上大会が開催されたことで、『週刊プレイボーイ』が他誌に先駆けて、陸上競技などの一般スポーツも扱うようになったのも幸いだった。特集記事でも、自由な発想で、さまざまな方向からスポーツ記事を書かせてくれた。それを読んだ『陸上競技マガジン』の編集者から声をかけられた。さらに91年世界選手権で、400mで決勝に進出した高野進の長文の記事を集英社の『Bart』に書いて以来、『Number』などのスポーツ誌や他の雑誌からの原稿依頼を受けるようになった。こうして次第に、アマチュアスポーツの専門ライターようになっていった。



●おりやま・としみ
阿南町生まれ。高校時代は陸上
班。スポーツ選手と自然体で接
することで、本音を聞き出すこ
とを得意とする。最新刊『日本
のマラソンはなぜダメになった
か』日本記録を更新した7人の侍
の声を聞け!』他著書多数。

にするような草ラグビーチームだったが、あとから入ってきた大学ラグビー部出身の集英社の編集者から、飲んでいる席で「お前、しつこい性格だから、スポーツライターにならないか」と声をかけられたのだ。

ライターという職業は思い浮かべたこともなく、文章を書いていたわけではなかったので戸惑ったが、「ダメだったらまた考えればいいか」と、その世界に飛び込んでみることにした。編集者にすれば酒の上で口にした言葉のようだったが、彼が所属する『週刊プレイボーイ』は、面白い奴だと思えば声をかけて、ライターなどをやらせる風潮もあった時期。そこにたまたま引っかけたのだ。

アマチュアスポーツ専門ライターに

初めて担当したのは、モノクログラビアのニュースペー
ジだった。ジャンルは芸能から事件、災害、環境問題など

五輪や世界大会も、取材パスのある無しに関わらず出かけるようになる。元々好きだった陸上など個人種目の選手のストイックさに共感するようになった。さらには「有名な競技より、あまり知られていない競技の選手を取り上げたい」という天の邪鬼的な性格も加わって、五輪種目をメインに取材をするようになったのだ。

陸上、スキージャンプ、水泳、そして…

陸上では園原の紹介で、選手だけでなく指導者やトレーナーたちともつながりができていった。短距離の伊東浩司もその一人で、彼の93年頃からの飛躍的な進化と、98年アジア大会で出した100m日本新記録10秒00への歩み、その後の9秒台を期待される苦しみも間近で見続けることができた。

スキージャンプもその頃はまだ北海道限定のスポーツだったが、89年に高校1年生の葛西紀明が世界選手権代表になったのを知り、自費で札幌の大会を見に行った。そのうち、V字ジャンプにいち早く対応した日本勢が世界でも一気に結果を出すようになってからは、記事にしろヘッドコーチの小野学さん(故人)が長野県出身だったということもあって、取材ではお世話になった。

水泳の北島康介は、2000年シドニー五輪に出場した頃から面白い選手だと注目していた。ちょうど集英社がスポーツ誌『スポルティーパー』を創刊、そこで2002年の夏前にインタビュ取材ができ、指導する平井昌昌コーチとも親しくなった。北島は、その年の秋に、200m平泳ぎで世界記録を出してから、あれよあれよという間に03年世界選手権で2種目とも世界記録で優勝。翌年アテネ五輪では2冠に輝いた。



2009年世界水泳選手権取材の合間に、ローマ・バチカンで自分もジャンプ!?

またフェンシング男子フルールの太田雄貴も、高校2年で日本選手権を制したのを見て小さな記事を書いてから6年後、08年北京五輪で銀メダルを獲得するという驚くような結果にまでたどり着いた。

記憶に残るスポーツ選手たち

そのように、注目した選手が活躍し始めたので、自分の仕事も増えたというのが正直なところだ。

輩、末續慎吾が03年世界選手権200mで、ハードル以外の短距離種目で日本人初の銅メダルを獲得したときは特別な思いで感動することができたし、2007年世界選手権大阪大会では彼の苦しみも目の当たりにした。

また、末續の後輩で岡谷市出身の塚原直貴は、08年北京五輪の400mリレーで銅メダルを獲得したが、ウイニングランを終えて戻ってきた塚原と末續にスタンドの最前列で声をかけると、近寄ってきたふたりにいきなり抱きつかれた。「やったー」「これで長野に帰れる」という彼らの声を耳元で聞いたのだった。

抱きつかれたといえは、1998年長野五輪でもラージヒルで銅メダル獲得が決まった瞬間、原田雅彦の「よかつたー」という嗚咽も耳元で聞いた。そうか、彼らはものすごいプレッシャーにさらされていたのだ、と改めて実感させられた瞬間でもあった。

2018年平昌五輪の楽しみ

来年は平昌冬季五輪も開催される。8回目の五輪出場となる葛西への期待は大きいですが、世間的に注目されるのは、やはりフィギュアスケートの羽生結弦の五輪連覇がなるかということだろう。

近年はフィギュア人気が沸騰中で、自分もここ数シーズ

これまでの取材で、印象に残っている選手は数多い。ジャンプの葛西は、自分をジャンプ取材に引きつけるキッカケになった選手だ。最初に取材していたのは秋元正博だった。1987年冬、フライングヒルで転倒して複雑骨折をした足首のリハビリをしながら翌年のカルガリー五輪を目指した彼を、北海道の下川町で取材した時、ひとりで遅くまで練習をしていた中学生を紹介された。それが葛西だった。94年リレハンメル五輪前から何度もインタビューをし、骨折を繰り返して飛ぶのが怖くなった時期の練習も見に行くなど、最も気にかけていたジャンパーだ。そんな彼が14年ソチ五輪のラージヒルで銀メダルを獲得したときは本当に嬉しかった。さらに、50歳まで現役を続けると言うのを聞いてビックリした。本人に「葛西が止めるのが先か、俺が動けなくなるのが先か、勝負かな」と話したが、果たしてどうなることか……。

陸上短距離では、伊東浩二には海外へ何度も同行して、世界と戦う姿を見続けられた。伊東の後



2014年ソチ五輪、ノルディック複合で銀メダルを獲得した渡部暁斗選手と（左端は朝日新聞社の記者）

ンは羽生が出場する全試合を取材している。彼の魅力はしなやかな滑りときれいなジャンプや表現力だが、彼の技術や表現に対する探究心の高さや、常に向上したいと思いつける前向きな姿勢には脱帽するほどだ。

今、彼が求めているのは、曲の中に入り込み、その瞬間に感じる自分の思いや感情をそのまま表現したいということだ。他の選手には真似できない独自の世界を、五輪へ向けてどう完成させていくかを見守るのを楽しみにしている。

また昨年、500mで全勝し、世界スプリントでは総合世界新で優勝したスピードスケート女子の小平奈緒は茅野市出身だ。彼女が信州大に入った頃から取材をしているが、練習量でも生活でも、ストイックの権化と思えるまでスケートに集中し続けている。2年間のオランダ留学で発想の幅も増え、精神面でも余裕を持って滑ることができるようになったことが昨季の好成績につながった。500mは前回のソチ五輪までのように2本の合計ではなく1本勝負になって、運も大きく左右する種目になったが、彼女の今の充実ぶりをみれば、羽生とともに「普通に滑れば金メダルは間違いない」という状況だろう。

そんな彼らの戦いを、喜びも苦しみも共に、来年2月、平昌でしっかりと見てきたい。